近世初頭の河川改修と浅間山噴火の影響

大熊　孝＝新潟大学工学部助教授（河川工学）

①はじめに

利根川の河川改修は，鎌倉時代に堤防の修築がなされたことに始まるとされ，長禄元年（1457年）には太田道灌が，当時，葛和田（熊谷市北方約8km）から南流し草加を経て江戸湾に達していた流路を幹川と定め，これに多少の掘削を加えたと伝えられている．しかし，これらについて詳しいことは分らない．

利根川の改修が本格的に始まったのは，徳川家康が江戸に入府してからのことである．これ以後，江戸時代を通じ今日に至るまで，さまざまな改修工事が利根川に加えられ，江戸時代初期まで乱流・派川をほしいままに東京湾に流入していた利根川は，今日，主流を銚子に落し，派川江戸川をもつ形に整理統合された．この整理統合は，流域を異にする利根川水系と常陸川水系（現在の鬼怒川・小貝川・霞ケ浦水系などの総称）を結びつけ，利根川をして日本で最大の流域面積（約16,840km²）を有する河川につくりかえてしまった．この人為的流域変更は，“利根川東遷事業”と総称されている．

しかし，この利根川東遷は，天明３年（1783年）の浅間山大爆発や足尾鉱毒事件などの影響と相まって，利根川を自然的にも社会的にも複雑で難解な河川にしている．この複雑さ・難解さのためか，利根川に関する文献は，日本の他河川に類をみないほど多数にのぼる．しかし，この文献の多さは，逆に一層，利根川を難解な河川にしているともいえる．

利根川を難解な河川にしている理由を見ると，

①近世初頭の利根川主流路，
②江戸時代に施された諸工事のそれぞれの目的，
③利根川大洪水に対する江戸幕府の対応策，
④浅間山大爆発の利根川への影響，
⑤明治政府の利根川治水方針，
⑥鉱毒事件とそれにつづく谷中村事件の利根川治水方針への影響，

などに不明確な点が多いことが挙げられる．こうした不明確さが，利根川に対する諸説を生み出し，300年をこえる歴史のもとに完成された“利根川東遷”を，江戸時代初期の約60年間に集約するという矛盾多い説を，多くの文献に採用させている．本稿では，これもまた諸説の一つにすぎないかも知れないが，これらの不明確さを可能なかぎり統一的に理解し，江戸時代の利根川像を明らかにしていきたいと思う．

②近世初頭の利根川

図４（22 p.～23 p.）は，文献に記された変流・乱流河道を中心に，地形図と現地調査から得られた近世初頭の利根川とその派川を示したものである．近世初頭において，利根川がこれらの諸派川をすべて流下していたかどうかは明らかでないが，文献などから利根川の主流がどのように流れていたか概略をみておこう．

≪橘山～烏川合流点≫

前橋市の橘山付近から下流烏川合流点までの現在の利根川流路は，16世紀中頃の天文年代（1532～1554年）の洪水で，高崎・前橋台地の用水路に切れ込んで変流したものと伝えられている．それ以前は，橘山付近で左に折れて，前橋市の東側，いまの広瀬川の川筋を流れ，伊勢崎を経て境町平塚で烏川を合流していた．現在，前橋付近の利根川河床は深く，広瀬川筋に利根川の洪水が氾濫するようなことはない．しかし，天明年代（1781～1788年）の洪水が広瀬川筋に氾濫していることから，近世初頭すでに変流していたとはいえ，広瀬川筋にも流水があったのではないかと思われる．

烏川は，寛永年代（1624～1643年）の洪水で変流し，八町河原で利根川に合流するようになった．それ以前の烏川は，杉山を経て下仁手付近で利根川に合流していた（図１参照）．慶長９年（1604年）に造られた備前堀は，この下仁手付近から烏川の水を引き入れている．この備前堀筋も烏川の派川であったらしく，備前堀北側の横瀬は，現在埼玉県であるが，天正年代（1573～1591年）は上野国新田庄勢多郡に属していた．八町河原付近から葛和田付近までの間は，幅３～4kmにわたって自然堤防の発達が良く，この幅以内で利根川・烏川は激しい乱流を行っていた．しかし，北側と南側の扇状地的な地形の発達により，乱流する幅が押えられ，この区間では大規模な変流はおこっていない．

≪葛和田から東南する流路≫

葛和田は，利根川が埼玉平野の主要部に流れ出すところにあり，かつて利根川はこれより南に流れていたと伝えられている．太田道灌は，前述した如く，葛和田から東南に向い星川に沿って綾瀬川に入る流路を利根川の幹川と定め，これに多少の掘削を加えたと伝えられている．この流路は，後述する文禄３年（1594年）会の川締切りに先立って締切られたとも伝えられており，近世直前頃まで流水があったのかも知れない．葛和田のすぐ南にある中条堤や，桶川市小針領家，元荒川と綾瀬川を分離する備前堤（39 p.図８参照）の築造が慶長年代（1596～1614年）であることから，その可能性は考えられる．しかし，この流路が当時利根川の主流であったかどうかは疑わしい．当時の技術をもってして締切り得た事実は，洪水の流下はあったとしても，平時は１派川に過ぎなかったことを意味しているように思われる．

≪古海及びその下流からの２つの派川≫

葛和田の対岸やや上流の古海付近から幅500m内外で東にのび多々良沼に入る逆川や，古海下流付近からはじまる谷田川も，利根川の派川であったと思われる．しかし，近世初頭これに利根川が流れていたかどうかは疑わしい．文禄・慶長年代に創設されたと伝えられる休泊堀は，渡良瀬川から水を引き入れ，新田・山田・邑楽の３郡を灌漑する用水で，古海付近から利根川に沿って流下するが，天保10年（1839年）休泊堀の用水補給を目的に古海村熊野に利根加用水が設けられるまで，利根川からの取水はない．

利根川左岸側で利根川から自然取水する用水は，この利根加用水の他に，渡良瀬川合流点直上流の北川辺村を灌漑する飯積樋管があるだけで，この樋管の創設は寛政年代（1789～1800年）である．

利根加用水・飯積樋管は，ともに天明３年浅間山噴火による利根川河床上昇の後であり，近世初頭に利根川左岸側に平水が自然流下する条件はなかったように思われる．これを裏付ける例として，延宝年代（1673～1680年）に明和村の大輪沼（会の川分派点の対岸付近）から利根川へ悪水落し開削の計画が立案されている．この計画は実現されず，元禄年代（1688～1703年）谷田川を拡幅して大輪沼の干拓がなされたが，計画立案の事実は，江戸時代前期に利根川への排水がまったく不可能でなかったことを示しているように思われる．

ただし，洪水は利根川左岸側に氾濫したらしく，文禄４年（1595年）に古戸から下流合の川（前述の会の川とは異なる流路）分派点付近に至る延長約33.5kmにわたり，高さ4.5～６m，敷幅27～29m，天端幅5.4～９mの大規模な堤防が築造されている．この堤防は，浅間山噴火以後頻繁に破堤するようになる．明治43年８月大洪水では，この堤防が数ケ所で破堤し，逆川・谷田川筋を氾濫水が流下し，群馬県邑楽郡一帯は大

注１＝小出博・日本の河川研究，東京大学出版会，1972年

水害に見舞われた．

≪酒巻・瀬戸井狭窄部と中条堤≫

葛和田を過ぎると，利根川の河床勾配は急に緩やかとなり，右支川福川合流直後の酒巻・瀬戸井付近で埼玉平野の主要部に流れ出し，著しい変流と乱流がはじまる．酒巻と対岸瀬戸井の間は，大正年代に第三期利根川改修工事が行われるまで，川幅400mと狭められていた．

この狭窄部は，近世以降における利根川治水の１つの焦点であるが，いつ頃創設されたものか明らかではない．しかし，文禄３年の会の川の締切り，文禄４年の利根川左岸堤の築造，慶長年代の中条堤・備前堤の築造などの諸工事からみて，近世初頭にはこの酒巻・瀬戸井狭窄部は，すでに築造されていたのではないかと思われる．

この狭窄部を境として，下流側は江戸時代初期には両岸ともほぼ連続堤が築造されていたが，上流側は各集落の囲堤がある程度で不連続であり，この上流一帯に洪水は氾濫遊水させられていた．そして，この狭窄部と熊谷扇状地（荒川新扇状地）の扇端の間を氾濫水が流下するので，その流下をささえるかたちで中条堤が築造されていた．中条堤は，江戸時代初期に何回か強化され，少しぐらいの越流にも破堤しないよう入念に施工されていた．しかし，利根川大洪水にはしばしば越流・破堤しており，中条堤の存在は上流地域と下流地域の紛争の原因であった．

このため，強さ・高さなどに一定の規約がとりきめられた論所堤になっていた．明治43年洪水でも中条堤は破堤した．これにまつわる騒乱と利根川治水の成立過程については，次章で詳論されるのでここでは省く．

≪会の川≫

この酒巻を過ぎ，行田市下中条で見沼代用水（1728年創設）を分け，約4km下ったところに川俣がある．近世直前，利根川はこの川俣で，現在の利根川筋と南に流れる会の川との２派に分れていたと伝えられている．しかし，現利根川と会の川にはさまれる羽生領内を，上川俣を起点に島川や葛西用水など数本の水路が走り，また，対岸には谷田川に向う流路跡があることなどから，かつては，この川俣付近で利根川が数派に分れていたものと思われる．

会の川は，近世直前の利根川幹川といわれ，上川俣で南に流れ，下新郷で流路を東にかえ，加須を経て川口でいまの古利根川に流れ込んでいたと伝えられている．会の川沿川には大規模な河畔砂丘があるので，ある時代に利根川の主流が会の川を流下したことは疑いないが，近世直前において，この会の川が利根川幹川であったかということになると，これは疑わしい．

利根川河畔本川俣在住の利根治水研究家大塚圭介所蔵の古絵図によれば，会の川流頭に大きな洲が画かれている（図２）．文禄３年の会の川締切りは，おそらくこの洲を利用したものであろう．

利根川主流が会の川に流れ込んでいた場合，文禄３年の締切りは非常に困難であり，技術的に不可能に近かったのではないかと想像される．

また上野と武蔵の国界は現利根川筋であり，新編武蔵風土記には会の川は利根川の支流とある．近世直前においては，利根川の主流は現利根川筋を流下し，会の川にはそれほどの流水がなかったと考えるのが妥当のように思われる．

≪合の川・北川辺村蛇行流路・浅間川≫

川俣から東流する現在の利根川筋を大越まで下ると，ここで利根川は３派に分れていた．（以下，栗橋付近については図３を参照されたい）．

その第１派は，北に流れる合の川（または間の川）であり，渡良瀬川につらなっている．この流路は上野と武蔵の国界であり（現在群馬・埼玉県境），かつて利根川の主流が合の川を流れたことを示している．

第２派は，大越から東へ向い，北川辺村で大きく蛇行しながら栗橋に流れ，渡良瀬川に流入していたものである．小出博によれば，後述する元和７年(1621年)開削の新川通は，この蛇行部の両側を結んだ捷水路であるとしている(注１)．この蛇行跡は，地形図で明瞭に読みとれ，ごく最近まで三日月形の沼沢地として残っていた．しかし，新川通の開削からみて，洪水の流入はあったかも知れないけれど，平水はあまり流下しなかったのではないかと考えられる．

第３派は，浅間川であり，佐波から南東に流れ，高柳で再び２派に分れていた．その１派は，北東に向い，栗橋で渡良瀬川につらなっていた．もう１派は，南西に向い，島川をあわせ，川口で会の川を合流していた．この南西に向う流路は，寛永年代（1624～1643年）に締切られている．

≪古利根川と島川≫

川口付近では，会の川・島川・浅間川が一たん合流し，再びここで古利根川筋と島川筋との２派に分かれていた．古利根川は，杉戸・粕壁を通り吉川で元荒川を合流し，猿ヶ又で江戸川に流入する派川を分け，新宿から西南に向って古

図１－烏川合流点付近変流図

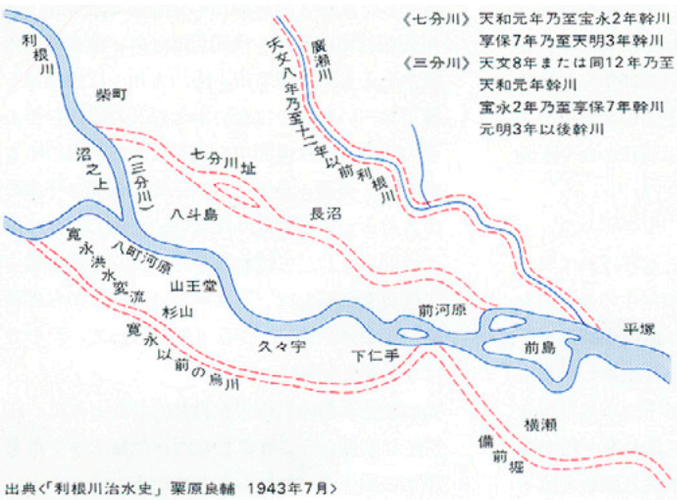
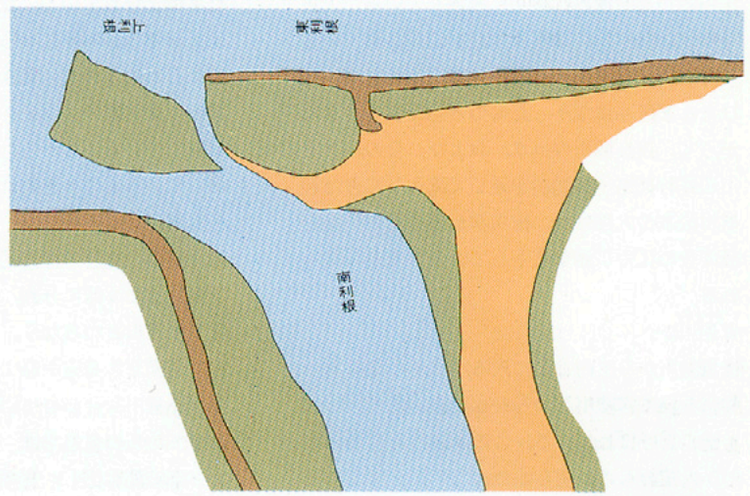


図２－会の川流頭の古絵図



隅田川に入り，隅田で入間川（現在の荒川）を合わせてから，浅草川または隅田川と称し，江戸海に注いでいた．これが近世初頭の利根川の幹川と言われている．しかし，後述する如く，筆者は古利根川を会の川・浅間川を通じて平常時および洪水時の流入はあったかも知れないが，利根川洪水の主流を流下させる幹川であったとは考えていない．猿ヶ又で江戸川に流入する派川は，享保14年（1729年）に締切られ，小合溜井として灌漑用水源に利用されるようになった．島川は，八甫・高須賀を経て権現堂川に合流していた．

≪権現堂川及び庄内古川≫

渡良瀬川は，かつて太日川または大井川と呼ばれており，従来，利根川とは別の流れであり，五霞村（現利根川・江戸川・権現堂川で囲まれた地域．現在茨城県所属）の中央部を東南に貫流し，庄内古川筋を流下し，金杉で今の江戸川流路に入り，浦安で江戸湾に注いでいたといわれている．これに対し，小出博は，渡良瀬川はかつて権現堂川筋を流れ，高須賀で島川を入れ，権現堂集落付近から南へ大きく蛇行しながら杉戸の東南あたりで古利根川筋に流入していた可能性があると指摘している(前掲書)．

この権現堂～杉戸間の蛇行河跡は，地形図上で明瞭に読みとれ，200～300m位の河幅で両岸に自然堤防が発達し，集落はその上に分布している．五霞村の地質は，図４の如く関東ローム層であり，周囲の沖積地との比高は関東造盆地運動によってあまり高くないが，渡良瀬川がこの中央部を貫流していたとは考えにくく，小出博の指摘は正しいものと思われる．ただし，権現堂集落付近から東流する分派川もあり，これは庄内古川筋を流れ江戸川に流入している．天正４年（1576年）には権現堂堤が創設されていることから，近世初頭には杉戸に至る蛇行部にはほとんど流水はなかったものと思われる．したがって，渡良瀬川の流水，および，合の川・北川辺蛇行流路・浅間川を通じて流入してきた利根川流水の大部分は，権現堂から庄内古川筋を経て今の江戸川筋を流下していたものと考えられる．

≪逆川≫

権現堂川から庄内古川に入る地点から北に向い，関宿を経て常陸川とつらなる流路があり，これも逆川と呼ばれている．この流路は，自然のものか人工のものか明らかではないが，すでに天正年代（1573～1591年）にはわずかながらも舟運に利用されていた．ただし，常陸川上流部は谷地の野水を流す程度の小河川であり，逆川も勾配がなくどちらの方向に流れていたか明らかでないが，おそらく細流であり，吃水の浅い小舟が通じた程度であろう．しかし，この逆川は，ここを中心として水路が，下総・常陸・下野・上野・武蔵と四通八達しており，運輸交通上の要所であったと考えられる．ちなみに，島川筋の八甫は中世を通じて河港として非常に栄えたところである．

≪常陸川≫

常陸川は，中世から近世初期の名称であり，平将門の時代は上流部は広川と呼ばれ，途中蘭沼を経て毛野川を合流し，香取海に流入していた．広川は，狭長な谷地田の流末に発達する大山沼・釈迦沼・長井戸沼などの沼沢の水を集めて流れる小河川であり，蘭沼に注いでいた．蘭沼は，現在の菅生沼・田中・稲戸井遊水池付近に相当し，浅い沼沢地であった．現在の小貝川合流点の直下流の布川付近から佐原付近までは，毛野川・手賀沼・印幡沼などを合流し，谷原・葦原と呼ばれる湿地帯を形成していた．しかし，応永年代（1394～年1428）には，金江津・押砂・結佐・曲淵などの村落がすでに成立をみており，寛永３年（1626年）には十三間戸～神崎間，寛永４年には神崎下流の江口沼の曲流をそれぞれショートカットしていることから，近世以前すでに流路がかなり固定していたものと思われる．佐原以下は、明治の利根川第一期改修工事前まで乱流をきわめたところで，上ノ島・笄島・境島などいわゆる十六島の間を流れて与田浦に集まり，往古の香取海を自由に流れる状態であったと伝えられている．ただし，十六島の開拓は，天正18年（1590年）から寛永15年（1638年）までに行われており、寛永３年（1626年）には佐原から津ノ宮・大倉をへて浪逆浦に至る流路を開疏していることから，近世以前にかなり干陸化しているものと思われる．

≪鬼怒川≫

近世初期の鬼怒川は，毛野川とも呼ばれており，下妻付近で２派に分れ，１派は現在の糸繰川を経て小貝川とつらなり，もう１派は小貝川と平行に南流し水海道を経て細代から東流し杉下で再び小貝川を合わせていた．杉下で小貝川を合わせてからの鬼怒川は，東南に流れ竜ケ崎を経て谷原に流れ出し，宮淵で南に流れ藤蔵で広川・手賀沼の末流と合流していた．

≪荒川と入間川≫

荒川は，近世初期まで，久下（現熊谷市）から現在の河道の東に沿い，佐谷田から今の元荒川を流れて吉川町で古利根川に合流していた．そして，寛永６年（1629年）に久下で荒川を締切り新しい河道を掘削し和田吉野川（入間川の支川）の流路に落すまで，入間川とはまったく別流であったといわれている．しかし，小出博は，荒川右岸の御正堰・吉見堰および屈戸付近から津田の西に流れる通殿川がともに和田吉野川に流入すること，また，吹上町市街地の東南で元荒川筋の前砂から小谷で現荒川に流入する古い蛇行跡のあることから，寛永６年の瀬替以前から荒川の水は諸所で和田吉野川と密接に結びついていたことを指摘している．

また，熊谷市街地より上流左岸には奈良堰・玉井堰・大麻生堰・成田堰が取水しており，上流３堰の残水は福川に落ち利根川に入り，最下流の成田堰の残水は大部分星川に落ち，一部が元荒川に落ちる．成田堰は1,500年前後の創設と伝えられ，のこり３堰は慶長年代の開発と伝えられている．このことから，かつてはこれらの用水路を通じて，荒川の水が利根川に流入していたものと想像される．

≪近世初頭の利根川主流路≫

以上を要約するならば，近世直前の利根川主流は，おおよそ次の如く流下していたのではないかと考えられる．すなわち，高崎・前橋台地に切り込んだ流路をとり，この台地を離れてからは，七分川（図１参照）筋を流れ，下仁手付近で烏川を合わせ，葛和田付近まで乱流し，川俣に至って会の川を分派し，おおむね現河道筋を流下し，大越で渡良瀬川に連らなる合の川・北川辺蛇行河跡流路・浅間川に分れ，渡良瀬川の流水とともに権現堂川，庄内古川，江戸川筋を流下していたのではないかと思われる．むろん，会の川あるいは浅間川を通じて，古利根川にも洪水や，舟運・農業用水に必要な程度の平水の流入を否定するつもりはない．しかし，会の川や浅間川を通じて流れてきた水は，島川を通って権現堂川にも流下していたであろうから古利根川への分派量は，かなり制限されていたのではないかと想像される．

この近世直前の利根川を自然的与件として，江戸時代初期からさまざまな河川改修工事や農業用水の開発が行われることになる．

図3の凡例

- 低水路
- 流路跡
- 堤防
- 〔河川名〕 江戸時代初期の開削流路
- 幕末から明治初期の締切

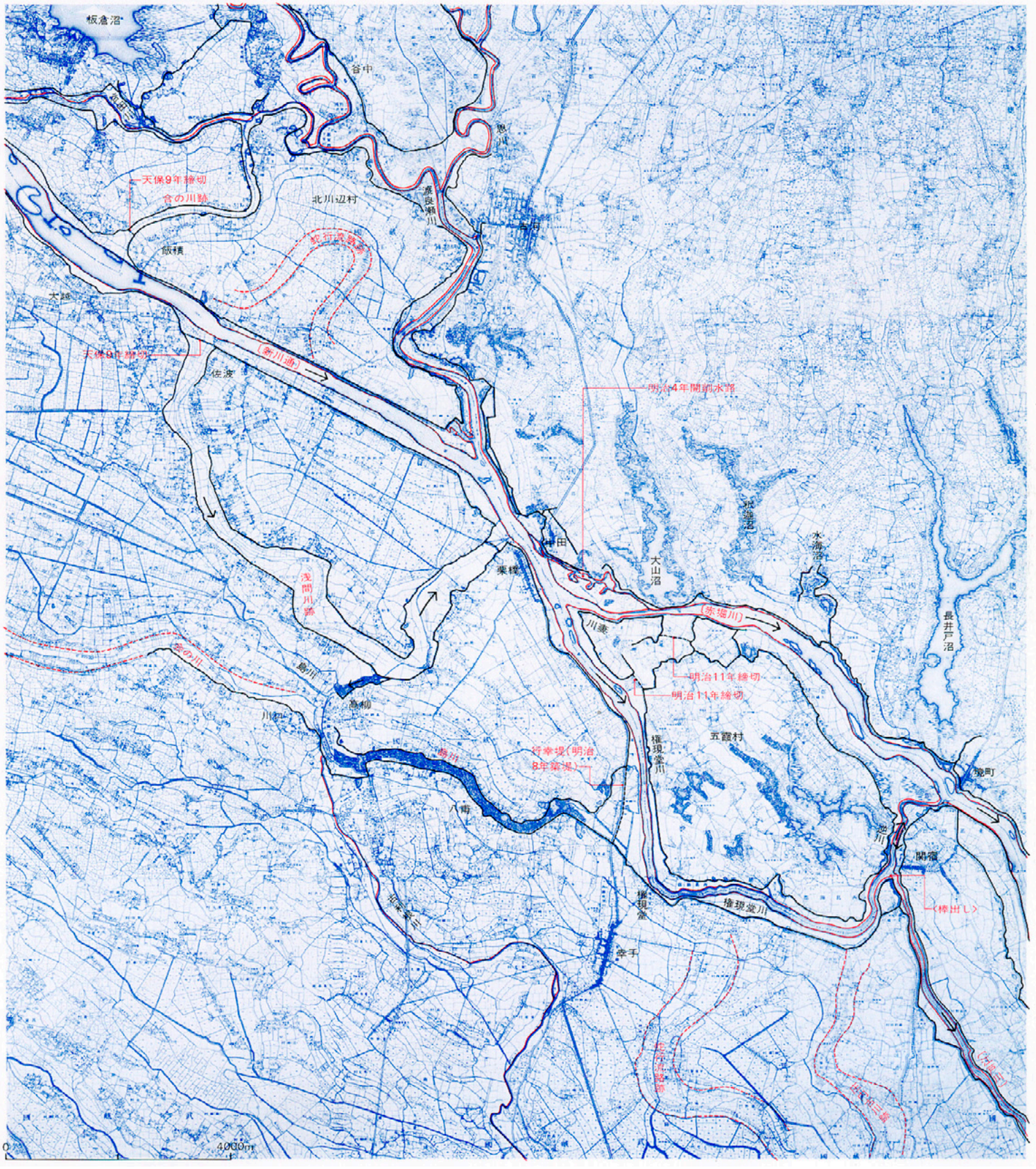



図３－明治10年代迅測図にみる栗橋付近利根川流路と流路跡